

オプション教材ニシキギ 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという点、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」(<http://www.mori7.net/mori/mori/annsvou.html>)をごらんください。

1 「ドタツ、バタツ」

という音が聞こえ、私は一体何が出てくるのだろうと、嬉しいよりも怖くなってしまった。

これまでで一番印象に残っているプレゼントは、七歳の誕生日のときのことだ。なにしろ、品物でも食べ物でもなく、生き物を贈られたのだから。

2 両親が買ってきたのは、アメリカンショートヘアの子猫だった。私を驚かせようと直前まで隠していたようだが、ハウスの中で元氣よく動き回る音が、廊下の向こうから響いてきていた。

3 まだ小さかった私にとって、それは未知の存在に対する恐怖となり、父が運んでくるころにはその不安は頂点に達していた。喜ぶとばかり思っていた父は、私が今にも泣きそうな顔になっているのを見て、困ってしまったと言っていた。

4 ハウスから出てきた子猫は、想像よりはるかに小さかった。まるで新しい住みかを確かめるかのように、まん丸の瞳で周囲をきよろきよろと見回している。よちよちとテールを歩き回っては、こてんと転んだりする。**5** そのかわいらしい姿を見て、私は「この子の面倒は私が見てあげなきゃ」と決意した。

「ロビン」という名前も、私が悩みに悩んでつけたものだ。しかし、そんなロビンとの暮らしは波乱の連続で、私は生き物を飼うことの大変さを知った。**6** 食事やトイレのしつけはもちろんのこと、壁紙をボロボロにされたり、お風呂に入れるたびに大騒ぎになったり、脱走したまま二日間も帰ってこず、心配で倒れそうになったこともある。

さらに、抱っこしてやろうと手を伸ばせば、するりと逃げ出してしまうのだ。**7** いつでも手にとれるぬいぐるみとは違うのだと痛感させられる。それでいて、自分がお腹が空いたときには体をこすりつけて露骨に甘えてくるのだから、なんとも憎らしい。

学校でも飼育係をした経験があるが、その仕事は気が向いたときにエサをやったり、先生の指示があったときに水槽を洗ったりする程度だった。

8 ロビンはもうすっかり、大切な家族の一員である。だが今にして思えば、あの七歳の誕生日に両親からプレゼントされたのは、もっと大きな価値のあるものだったのかもしれない。

9 つまり、生き物を世話することですぐに皆さんの思い出や教訓を得る、という機会だ。こうした自分の人生に生きてくるものこそ、人間にとって本当にありがたいプレゼントなのではないかと思った。

0

（言葉の森長文作成委員会

こ）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 紫色に輝く大粒の果実が、目の前にいくつもぶら下がっている。その中の一つをもぎとって口の中に放り込むと、みずみずしい甘酸っぱさが一気に広がった。自分の手でブドウの実を摘んで、その場で食べるなんて初めての体験だ。2 感激して後ろを振り向くと、父も母もそれぞれ夢中でブドウを頬張っていた。私たちは「旅行好き」、「食いしん坊」という点が共通した家族である。

父は仕事一筋の働き者で、毎日遅く帰ってきてはご飯を食べてすぐ眠ってしまう。3 趣味らしい趣味もないそうだが、旅行に出かけたときだけはニコニコしていて、見違えるほどエネルギーシユである。

母は母で、よく同窓生と旅行に出かける。帰ってくる日の夕飯は、決まって地方の名物弁当だ。

4 朝早くに起きて、急な日帰り旅行に出発したことは数知れない。この日の目的地は、山梨のブドウ畑だった。

父と母は、どちらも車の免許を持っている。運転が交替できて楽なので、気軽に出かけられるということもあるだろう。5 父は安全運転だが、母は極めて危なっかしい。一度、赤信号に気がつかずスーッと通過しそうになったときには、私が大声で注意しなければならなかった。

山梨に着いたら、さっそくブドウ狩りである。

6 新鮮なブドウをたっぷり味わった後、ここが母の知り合いの畑だということを教えてもらった。母は若いころにここへ旅行に来て、農家の人と仲良くなったのだという。旅をすることで、新しい出会いが生まれる。7 両親と旅行をする

と、ときどきこうした発見がある。ブドウ畑の隣には、ワインの工房もあった。飲める人がいないのが残念だ……と思っていたら、気付いたときには母が真っ赤な顔をしていた。

8 帰りの運転は父が一人ですることになってしまった。

「可愛い子には旅をさせよ」というが、私の旅はたいがい両親と一緒に。しかし、ひとり旅をするのはまた違う意味で、私は旅からいろいろなことを学んでいる。9 父と母を見ていると、大人になつても旅を楽しむ心を忘れないことが人間には必要なかもしれない、と感じるのである。

(言葉の森長文作成委員会 へ)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 「ユウって本当にロマンがないね！」

姉にそう言われて、僕はぼかんと口を開けてしまった。姉のきつい言葉には慣れてはいたが、そんなことを言われるとはまったく予想していなかった。

それは去年、双子の姉と二人で、夏休みの自由研究について相談していた時のことだ。2 僕たちは地元で伝わるおとぎ話について調べ、発表しようと考えていた。「キツネに化かされて田んぼに落ちた」とか、「山で助けたサルがお返しに木の実を持ってきた」などという話に、姉は胸をときめかせているようだった。

3 一方の僕も、内心燃えていた。こういった話は研究のしがいがある。そう思つて、「キツネやサルにそんな知恵があるはずはないから、人間どうしの出来事をたどった話ではないか」と自分の考えを話したのだ。そうしたら、姉はいきなり怒り出してしまった。

4 姉によると、「ロマンがない」のが僕の短所だという。せっかくかわいらしい動物たちの物語を想像しているのに水を差すな、というのである。しかし、そう言われても納得はいかない。僕にも意地があった。結局、僕と姉はたもとを分かち、同じ題材で別々に発表をすることになった。

5 そして夏休みが終わり、自由研究を発表する日がやってきた。出番は姉が先だ。姉は自分で書いたイラストを見せながら、キツネやサルが主役のおとぎ話を紹介していった。研究発表というより紙芝居大会のようだったが、悔しいけれど面白い内容になっていたと思う。

6 おかげで僕はすっかり尻込みしてしまった。今度は姉ばかりか、クラスのみんなに「ロマンがない」と言われるかもしれない……。だが、今さら逃げ出すわけにはいかなかった。

7 僕は勇気をふりしぼって、図書館で調べた話を発表していった。昔は道路が舗装されておらず、酔った人が田んぼに転落するのはしょっちゅうだったこと。山を挟んだ隣の村から来た迷子を、送

り返してあげた話があること……。発表が終わったあと、担任の城田先生はにっこり笑つて、こう言つてくれた。

「とても面白かった。ユウくんの探究心はすごいね。」

8 その言葉を聞いて、僕はすつと胸のつかえがとれたような思いがした。

確かに、僕は姉の言うように「ロマンがない」のかもしれない。しかしその代わりに、先生も認めてくれた「探究心」がある。それが僕の長所だ。「短所をなくすいちばんよい方法は、今ある長所を伸ばすことである」という言葉がある。9 僕は自信を持つて、長所である探究心を伸ばしていきたい。

人間にとつて、自分の長所や短所に気付かされる経験は貴重である。指摘してくれる人がいるということも、ありがたいことだ。今では、城田先生はもちろん、姉にも感謝している。

（言葉の森長文作成委員会 こ）

0

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34